

第2回 有識・議員部会 開催概要

日 時：令和2年11月24日(火) 18:30~20:00

場 所：尼崎市役所 議会棟2階 議員総会室

出席委員：久部会長、小坂委員、小森委員、堂園委員、松原委員、村田委員、安田委員、
丸岡委員、楠村委員、徳田委員、山崎委員、綿瀬委員

欠席委員：川島委員

事務局：中川政策部長、橋本都市政策課長、都市政策課職員

【議事要旨】

議題1 開会

議題2 尼崎市立歴史博物館あまがさきアーカイブズによる歴史講座

●講師 尼崎市立歴史博物館あまがさきアーカイブズ 辻川 敦 氏

議題3 「尼崎らしさ」について

●辻川氏を交えて、意見交換

(部会長)

講師の辻川さんの話を交えながら議論をしていきたい。

(委員)

尼崎が、インナーシティである要因は、製造業、あるいは小売業が地盤沈下していった時の産業構造の転換でうまくいかなかったのではないかと考えている。この時代、他市に取り残されていったのは、リーダーシップの欠如と考えたらいいのか。

また、川崎と比較分析することにより、「尼崎らしさ」の特徴がでるのかなと思うが、比較分析するような“まち”や事例はあるのか。

(辻川氏)

大阪や尼崎のように古いタイプの工業地帯、特に尼崎のように特定の工業分野に頼る都市は、それがトレンドになり良い時期は良いが、必然的にピークがきてしまう。尼崎の主体性ではどうしようもないオイルショックなど世界全体の経済変動の影響で、日本の製造業全体の前提条件が変わってしまうので、地域的なリーダーシップだけではおそらく乗り越えられない。その時、企業は会社の移転や業種を変えることも考えるようになっていく。そういう点では、近代の工業化というのは、ある意味持続性に欠けている部分もあり、むしろそこを問題として考えるべきではないかと思う。

尼崎を見ていると、経済的発展のため、早い時期に都市問題・社会問題が顕在化して、時代に先駆けていく側面も大きかったと思うので、その時代になぜダメだったのかという分析よりも、そのしんどいなかでどのように克服できたのか、そしてそれは日本全体、世界全体に展開できる要素があるのかを考えたほうがいいのではないかと思う。

また、比較してきた都市としては、川崎があげられるが、特に高度経済成長以降の時代についてそのような比較分析事例などで参考になるものがあまりなく、都市行政史や地方経済史の研究蓄積は、昔以上に日本では希薄になっているような気がするし、あまり流行らないので、必然的に比較研究もないように感じる。

(部会長)

昭和初期ぐらいまでは、地元の有力者がしっかりと地域の為にいろいろ動いてきたのが、尼崎製鋼や尼崎紡績のようにどんどんと合併吸収されて、そうすると、ローカルのもが見捨てられてしまい、トカゲのしっぽのように切られるという、企業側の動きが多々あったのではないかと推測される。そこには、先ほど辻川さんがおっしゃった時代の流れなのかもしれないが、何かその企業側のやり取りに本当のところ労働企業がしっかりやっていたら違ったのかもしれない。大企業だけになって最終的には切られたというような悲しい歴史があるのではないかと思う。

(辻川氏)

そういう側面もないとは言えない。

一方で、全ての企業がそうではなく、現在でも、猪名寺にある東り株式会社のように地元を大事にしている企業もある。ただ、大きな資本のなかにはいっていくというのは、ある意味日本のような急速な経済成長のなかでの経済的必然性があり、悩ましいところだ。工場の規模が大きくなってくると、騒音や公害被害を考慮して住宅地などとはゾーニングすることになるが、ますます企業とか工場と距離感が生まれ、接点がなくなってしまう。仕方のないことだが、それをどう考えるのかということ。

また、このような工業化や公害についての講演を市内でも市外でもすることがあるが、そういった際に、ちょうど話していた時代に、尼崎の工場に勤めていたという方がいらっちゃって、働いている側からしたら、地域貢献しているつもりなのに、尼崎から追い出されたような気分だったといわれたことが何度かあった。政策的に追い出すということでは必ずしもないのだが、当時の企業や働いていた人にとってそういう風に見える局面があったことは間違いなかったと思う。そう考えると、色んなことが意図と反して、社会問題として起こってどのように解決するのか難しくなっていくなかで、やはりそのようなしこりも残してしまうので難しいと感じている。

(部会長)

川崎との比較で言えば、川崎は産業構造の転換時に、研究開発の拠点として舵を切っている。その点、尼崎は研究開発に舵をきらなかつたというところに違いが見えてくるのではないか。

(委員)

まちづくりの発展で聞きたいのが、43号線の建設と、中央商店街ができた経緯について、教えてほしい。

また、最初の再開発事業であったと言われるさんさんタウン、その後、出屋敷、立花南、JR 尼崎北側と続いたが、再開発には尼崎のまちづくりの大きな流れがあるように思う。その中で、先ほどのお話で、築地では住民の主催で計画づくりをされたということだが、その辺、再開発では住民との関わりという部分が結構あると聞いているが、住民自治のなかで再開発がどのようにされてきたのか、もし研究されていたら、教えていただきたい。

(辻川氏)

お城がなくなった後の街道筋、東本町から城内、西本町にかけて、本町通商店街という数キロメートルある巨大な商店街が明治期に形成され、いくつもの老舗が並ぶ阪神地方でも有数の商店街であったが、戦時期に空襲に備えて空き地を作る際に、商店街の片側が撤去され、後にその空き地に43号線ができることになる。実は、都市計画道路を作るために、計画的に疎開空き地を作るという話は尼崎だけでなく結構あった。商店街が片側撤去され、さらに戦時期、戦後混乱期で経済的にしんどいということもあり、本町通商店街の皆さんはこの場所での復活は無理だと判断して、今の阪神尼崎駅の北西に集団的に移転をし、さらに、闇市からできた三和、新三和と接続して、今の中央商店街となり、高度経済成長期に再び阪神間に繁栄を見せたという歴史がある。ある意味尼崎のたくましさの象徴のように感じる。2号線だけでなく、他にも幹線道路が必要というのは、当時の経済的状况からも分かるが、ただ、阪神間随一の城下町の商店街をつぶすというのは、歴史を勉強する立場からすると悔しく思う。

また、再開発について、当時の区画整備については、地元の地主さんからの資料提供により、土地区画整理組合の皆さんが、どのように考え、行政とどのように意見交換し、専門家の意見を取り入れながら、どのような“まち”を作ったのかわかっているし、市役所のOBで、都市開発を勉強された方の論文でも、いろいろな地権者がいるなかで、いかに行政が苦勞して開発してきたかという話が多く述べられている。

(部会長)

さんさんタウンから着々と再開発が進んでいくが、そういう意味では、すごいプライドを持ってしっかりと“まち”を作ってきたという伝統が尼崎市役所のなかにもあったんだなと感じている。

ただ、さんさんタウンも出屋敷も、現状苦戦しているが、市役所の職員が悪いというより、地権者にも課題がある。再開発事業は、どうしても市に頼ってしまう地権者が出てくるのは、尼崎市だけでなく他でも見られることで、ビルになりきれいになると、当初は客足も増えるが、その時に蓄財をして次のステージを自分たちで切り抜けないといけないなか、散財してしまい、いざ動くときになって資金がないということがおこる。あるいは、地権者の方が商売をやめて、土地の権利をもったまま、他者に貸し出すことになるのが典型例で、そうすると、自身が商売をやっているわけではないので、動かない

し、テナントも所有者ではないので、動けないということが起こる。再開発事業そのものを変えていく大きな課題が尼崎には今あるのかなと思う。

そのあたりは、次期総合計画でも言いたいところになるのかなと思うが、次の時代には、再開発のようなお金をかけた事業ができない時代でもあるので、違う形での都市の更新を、審議会のなかで考え、将来数十年もさかのぼって見た時にどのような評価ができるのかということを次回議論させていただくのかなと思っている。

(委員)

尼崎市民の出身地というと、古い地の方や朝鮮の方を除いて、九州や四国の方が、工場の大部分の労働供給をしているように感じている。特に鹿児島や沖縄の方々が圧倒的に多く感じており、辻川さんの知っている範囲でその背景などが分かれば教えていただきたい。

(辻川氏)

統計的には確認しようがないが、尼崎市長であった野草平十郎氏の最初の選挙時も、対立候補の海江田氏は鹿児島県人会がバックにつき、勝利確定とされていたのは、当時尼崎市の人口の三分の一が鹿児島県人会とつながっていたと言われている。事実かはわからないがそのような噂が広まるほど、数が多かったというのは事実で、そういう研究もある。歴史的な背景でいうと、大阪や尼崎のような都市部の工業化は、遠隔地から人を呼び寄せることにより、労働力を確保し、発展した。労働力を確保するため、地方に周旋人を設け、労働環境は工業化初期にはひどい話もあったが、企業の経営も安定し、日本経済が経験を積んでくる大正期以降、そういうこともカウンターパートとして労働運動や、法的整備も進むなかで、企業も地方に安心できる仲介があり、地方にも強いパイプがある周旋人が尼崎などの都市部の工場を紹介する。一人がいくと、そこからその人を頼って地方から出てくる。鹿児島や沖縄は経済的に非常に厳しく、次男以下の人は大阪や尼崎、神戸にでてきて、そういう形ができ、コミュニティができ、たくさん来るようになったというのが背景と考えられる。

(部会長)

私も父親が高知県出身だが、父親が亡くなった後、わたしのところに高知県人会から案内がきたこともあって、すごいネットワークだと思った。九州の人たちがしっかりと基盤を作ったんだとも感じた。

(委員)

新田が尼崎に広がってきた当時、どれくらいの年齢層の方が新田で働いていたのか、また、農業されていた人の割合がどのくらいなのか、教えていただきたい。

(辻川氏)

新田が農業から工業地帯へと変化していく明治・大正から昭和初期について、今日は資料を持ち合わせていないため、正確には言えないが、もちろん現在と人口構成は全く違い、高齢化が進む現

状とは異なるのは間違いない。

また、先ほどの話で、地方農家の次男以下は都会にでてこないと言ったが、実は江戸時代からそうで、結果として、実際の人口構成は今よりも若い人が多かったことになる。都市部に働きに出てきた人の多くは農村地帯に戻るが、直系の跡継ぎでない次男以下はそこから働きにでるという構造におそくなっていると思う。

(部会長)

戦前は、地主小作なので、地主がしっかりと農業経営して、その方々のおかげで社会経営を回すという取り決めがなされていた。

(辻川氏)

尼崎では、労働運動の話もあったが、戦前、尼崎を含む阪神地方は農民組合運動も盛んであった。都市化にともなう土地取り上げというのがあり、例えば室戸台風被害で田地に砂が入って、塩がはいった、もう尼いもが作れないとなると、元に戻すのが大変で、地主は、小作経営を続けていくよりも、その時のトレンドである臨海部工業地帯に展開していったほうが良い、あるいは鉄道駅周辺も市街地化して“まち”にしていこうと区画整理に動き出した。しかし、そこには小作人がいて、離作料を補償して土地を返還させ、その小作人は、都市型の仕事を探していかないといけないという変化の時代にあった。

(部会長)

そういう意味では、農業経営者は地域のためにがんばってくれていたし、農民は農民組合運動を、労働者は労働運動をしてきた。市民側が主体的に社会をつくる運動が尼崎ではしっかり根付いている。

(委員)

尼いもが、かつて名産品だったと思うが、尼崎でどのように作られるようになって、どのような経緯で名産品になったのか。

また、尼崎精工が聴覚障害者を多く雇っていた歴史的な経緯を教えてほしい。

(辻川氏)

尼いもが最初に作られたのは、尼崎の城下町の南、初島あたりで、江戸時代にその原型となる芋が生産され、商業生産しブランディング化され拡大していったのは、明治に入ってからと考えている。非常においしい芋で、一番いい芋は京都の料亭にだされる。おいしさの理由としては、いくつかあるが、塩っぽい砂地が尼いもの生産に良く作用するようだ。また、とても手間のかかる生産方法で、種イモを枚方づくり、それを尼崎の畑にもってきて、寝ずに作業する時期もあるほどという。手間暇かかる商品であるが、ブランド力があり、臨海部から全体に広がっていったと考えられる。

尼崎精工で聴覚障害者が多く働いていた経緯であるが、結論としては、福祉的なことではなく、合理性からである。当時の経営者である杉山巖一（こういち）氏は、職人の技術に頼る生産は古く、アメリカのように、すべてマニュアル化、標準化し、誰でも仕事ができるようにしなければならないと考え体制を整えていったが、戦時期の労働力不足のなか、勤労働員の学生では、根本的に無理があった。そのようななか、京都の職業紹介所から、聴覚障害者が就職に困っているという話を聞き、当社のシステムであれば大丈夫だろうと、受け入れたのが始まりである。もともとの動機は、経済的合理性であるが、一方で、手話ができる人をセットで受け入れ、聴覚障害者の皆さんが、ちゃんとコミュニケーションをとれるように気持ちよく働けるようなシステムも作った。聴覚障害者の皆さんは、勤労働員の学生とちがい、労働経験もあるので体力があり、また、この仕事を逃すまいと非常に頑張るので、学生を使うよりも業績が上がるということで、尼崎精工はさらに聴覚障害者の雇用を増やしていった。一番の理由は、経済的効率であったが、それでもその時代にちゃんと環境を整えてそのような人々を受け入れたということはすごいことである。

（委員）

コメントとして、先ほど地方出身者の多くは、長男だとおっしゃられたが、長男が後を継ぐ長子相続は、武家文化であり、町民は必ずしも長子相続ではなかったので、鹿児島県出身者も末子相続ということも考えられることから、次男三男以降とも限らないのではないかと思った。

また、資料の修正をお願いしたい。「第1回 有識・議員部会 開催概要」3ページの、「新しくストーリーが作れるまち」の部分で、「らしさ」とは、史実から導くのは難しいが、「人」が絡むということで物語が生まれ、「らしさ」が表れるのではないかという趣旨で申し上げた。

このように我々は「らしさ」について検討しているが、どのように「らしさ」を抽出していくのか、例えば先ほどでた高知県でいうと、稀有総代、開口的などという県民の「らしさ」は、司馬遼太郎の坂本竜馬のストーリーが由来していると思うので、尼崎にもそのような突出している人物で「らしさ」を考えるのか、あるいは時代を築いた集団で「らしさ」を考えるのか、どのように「人」を絡めて「らしさ」をみていくのかは、歴史的に捉えたらどこにあるのか、可能かどうかを辻川さんにお聞きしたい。

（辻川氏）

長子相続の件については、少し強調しすぎたかもしれないが、単純に、「次男だから」「三男だから」という話をよく聞くように思う。末子相続はどちらかという江戸時代の農家で、末子はその家を継ぎ、長男が分家分けをするというパターンなのではないかと思う。

「らしさ」については、あまり歴史学で「らしさ」を追求した研究があるのかどうか私はよく知らないが、あまり歴史学者はそういうことに関心が少なく感じる。尼崎の「らしさ」は、多様性でいいのかなと思うし、「らしさ」をあるものという方向で考えるととても単純で、どこにいても「尼崎はそういうまちでしょ」というような固定されたイメージを未だに持つ人もいるが、そうでなくて「らしさ」というのは一人ひとりの市民が、どのような体験をして、何を尼崎らしさと思うような思考回路とか仕組みにするかどうかだと思う。

先ほど話した築地や、富松でも富松城跡を残すなど、尼崎にはまちづくりに熱心な地域がいくつもあり、大体どこでも、新住民旧住民の話があり、それをうまく包み込んでいる。要するに、住んでいる人にとって単に働いて帰ってきて寝る場所なのか、その一員となるのか、そしてそこに意識をもって参画するかどうかで、何が「尼崎らしさ」で、何が尼崎かという意識が全く変わると思う。帰って寝るだけの場所で、生活できたらいいとなれば、「尼崎らしさ」というものはとても貧弱なものになるかと思うので、ちゃんとコミュニティの一員として、アイデンティティをもってこのまちをよくしたいと思うと、全く違う「尼崎らしさ」が生まれ、それは、ある意味多様であり、それでよいと思う。そのような営みと無関係で客観的に「尼崎らしさ」を考えてもあまり生産的ではないと感じている。

(委員)

尼崎と言えば、労働者のまちと言われ、労働組合の活動も盛んだが、過去の歴史で労働者の目線にたって、象徴的な出来事があれば教えてほしい。

また、尼崎は、福祉の面も充実していると思うが、そういった基礎となるものが何かあったのか、市民運動のなかで作られたなど、色々な要因があったと思うが、何かあれば教えてほしい。

(辻川氏)

労働運動については、尼崎は大阪とセットで、大正期から日本のなかでも盛んなエリアの一つである。戦前の東京などの労働運動をみると、インテリ層が指導し、官公庁関係の組合が強かったりしているなか、尼崎では、製造業の工場で組合を作り上げ、労働争議でつぶされたり、弾圧されたりする組織が多かったが、クボタは大正期に組合をつくり、現場の労働者が組合活動の委員を担い、若いころから委員長を務め、戦後には国会議員まで勤められた方がおり、地道にこのような活動が戦前からあったというのも、とても特徴的だと思う。

福祉の面で言えば、尼崎は都市問題がいつも先取りする都市だとお伝えしたが、それは福祉課題も同じで、例えば、貧困対策として失業者向けの施設を作ったりするなど社会政策が早い時期から大阪や尼崎では取り組まれていたこともあり、それが今の福祉施策につながっているという歴史もあったことは、現在も学ぶべきところかと思う。

(部会長)

辻川さんから、やはり都市化が早いほど、基盤整備がきちんとできているという話があったように尼崎の道路をみていただくと、整然と道路がとおっており、基盤を作ってから都市化がされたということが、都市計画的な特徴かなと思った。

また、それぞれの時代のフロンティアを尼崎がある意味牽引していたというように感じたので、では、次の時代のフロンティアは一体何で、尼崎は何を牽引していくのかという議論をすればいいのではないかと考えている。

最後に、実際に「らしさ」とは何なのか。あるいは「らしさ」をどのように使っていくのかという議論を次回していければと思う。もともとの地形があり、街並みがあって、営みがあり、次の営みが歴史に

つながり、そこに人々の物語が付け加えられ地域ができあがっていく。これをいかに読み取っていくのかが、「らしさ」の一つの意味ではないかと思う。我々が勝手に思いつきで言うのではなくて、ちゃんとベースがあって、ベースの地域性というのを再度私たちも見つめなおして、そのうえで次の歴史を作っていく、付け加えていくという議論をしたいと思っているので、次回は、根本的な「らしさ」は総合計画でどのように使っていくのか、議論させていただきたい。

以上